

## 大学生の参禅行動の構造分析（その五）

江見 佳俊  
千野 直仁

### 一、問題の所在

本報告は、本学の建学の精神である「行学一体」「報恩感謝」の禅的教養を学生に体験させる手段のひとつとして、主として新入生を対象に、本学が毎年行ってきた永平寺参禅行事に際して、学生課が実施している付表1に示すような質問項目からなるアンケート調査の資料について、われわれが「大学生の参禅行動の構造分析」と題して、昭和四八年以降継続してきている一連の研究の第五報である。

ここで、「構造分析」という言葉を、われは、次のような意味において用いている。すなわち、われわれは、学生の参禅行動を、単に参禅にまつわるさまざまな態度や経験の集積

大学生の参禅行動の構造分析（その五）（江見・千野）

されたものとしてではなく、一、参禅前の坐禅に対する態度（第一ステージ）、二、参禅中の諸経験（第二ステージ）、三、参禅後の坐禅に対する態度（第三ステージ）という三つのステージから成る一連の連続過程として捉えようとしている。このように、参禅行動を、これら三つのステージの時間的な流れの中で力動的に解明していくことを構造分析とよんでいるのである。

こうした視点に立ち、本研究の第二報から第四報までは、それぞれ昭和四八、四九、五一年の各年度での調査資料を用いて、主として参禅行動の第三ステージに焦点を当てて坐禅を生活のうちに生かそうとする態度形成の基礎になっていると考えられる、参禅経験を媒介としてもたらされる参禅

の前後での坐禅に対するイメージ変化の規定因を探ってきた。言い換えれば、第一ステージの参禅前の坐禅に対する態度とりわけ参禅の動機や第二ステージの参禅中の諸経験のうち何が参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化を規定する要因になっているかを検討した。分析の方法としては、多変量データ解析の一方法として、林知己夫氏によって開発された数量化Ⅱ類を適用したが、分析の結果、各年度での調査資料にはほぼ共通することがらとして、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化は、坐禅が指導どうりできたかどうか、法話を有意義と感じたかどうか、及び永平寺の雰囲気を感じたかどうかが、第二ステージでの参禅中の諸経験の三要因によって規定されていることが判明した。

今回は、こうしたこれまでの研究成果を踏まえ、その後の昭和五九、六〇年の二年度分の調査資料をもとに、上述の第二報から第四報までの分析結果が、その後、ほぼ一〇年を経過した現在の学生の参禅行動においても同様に示されるかどうか、もし違いがあるとするれば、それはどのような点においてであるかを検討することを意図した。

## 二、方法

これまでの諸報告におけると同様、分析方法としては数量化Ⅱ類を適用した。この数量化Ⅱ類の特徴については、これまでの諸報告においても、必要に応じて述べてきており、重複する点もあるが、今回の分析の対象とした調査資料との関連性も考慮しながら、その概略について摘記しておく。数量化Ⅱ類を適用するためには、まず、サンプルは、何らかの基準に照らして、いくつかの排反的な範ちゅうないし群に分類されなければならない。この範ちゅうないし群は外部基準ないし基準変数と呼ばれる。次に、サンプルの外部基準上の範ちゅうの違ひは、それを規定するいくつかの定性的要因により説明できるものと仮定されるが、これらの定性的要因は説明変数と呼ばれる。ここで定性的とは、変数の値が連続的な数量ではなく、単なる範ちゅうから成っているということである。なお、これまでの諸報告では、外部基準の範ちゅうをカテゴリと表現してきたが、今後は、これを範ちゅうと統一して表現することにする。また、今回の分析でのこれら外部基準と説明変数は次のとおりである。

まず、外部基準は、付表1までの質問項目2の⑤での選択肢を次のようにまとめた六つの範ちゅう(群)である。

参禅前のイメージ↓参禅後のイメージ

- 1 (よい) ↓よい ( )
- 2 (よい) ↓どちらでもない ( )  
よい ↓わるい
- 3 (どちらでもない) ↓よい ( )
- 4 (どちらでもない) ↓どちらでもない ( )
- 5 (わるい) ↓よい ( )  
わるい ↓どちらでもない
- 6 (どちらでもない) ↓わるい ( )  
わるい ↓わるい

また、説明変数は、付表1で質問項目2の⑤以外の第一ステージの一変数と第二ステージにかかわる各質項目の八変数の計九変数である。

### 第一ステージ

#### 1 参禅の動機

### 第二ステージ

#### 2 坐禅時間の長さの評価

#### 3 坐禅指導に対する評価

#### 4 坐禅指導の受容度

#### 5 食事に対する満足度

#### 6 睡眠に対する満足度

大学生の参禅行動の構造分析(その五) (江見・千野)

### 7 法話に対する評価

#### 8 永平寺の雰囲気に対する態度

なお、このようにして、学生の参禅行動の年次変化を分析するについて、煩雑さを避けるために、一問題の所在で述べてきたようなこれまでの分析結果を考慮して、昭和四八、四九、五一年の各年度の分析結果については、昭和五一年度の分析結果で代表させることにした。

サンプル数は、昭和五一年度と五九年度がともに五一四名、昭和六〇年度は六五六名である。

### 三、結果と考察

一〇年前の学生の参禅行動と最近の学生の参禅行動を比較検討するために、各年度別の調査資料に対して数量化Ⅱ類を施し、得られた分析結果から、まず要因の効きの強さを表わす指標の一つである偏相関係数の値の上位のものをいくつかぬき出して、その順位づけを試みた。表1に示すのがその結果である。各年度により順位づけた数が異なるのは、偏相関係数の大小関係が各年度によって異なっており、一律に上位なん位までというように示すことには無理があるためである。なお、偏相関係数は、一般にm個の変数間に複雑な相関

表1 参禅の前後で坐禅に対するイメージ変化の規定因の年度間比較注

ステージ	質問項目 (説明変数)	軸		第一軸			第二軸		
		年度	相関比 $r$	51年度	59年度	60年度	51年度	59年度	60年度
第一 ステージ	参禅の動機 (積極的—消極的)				3(0.164)	3(0.146)			
第二 ステージ	坐禅時間の長さの評価 (長い—短い)			2(0.253)	2(0.166)	2(0.170)			
	坐禅指導に対する評価 (きびしすぎる—もったきびしく)				4(0.160)		3(0.162)	2(0.169)	3(0.127)
	坐禅指導の受容度 (指導どうり坐禅できた—否)								
	食事に対する満足度 (充分—不足)						1(0.181)		
	睡眠に対する満足度 (充分—眠れなかった)								
	法話に対する評価 (有意義—否)			1(0.294)	4(0.160)	1(0.227)		3(0.126)	1(0.182)
	永平寺の雰囲気に対する評価 (良かった—否)			3(0.243)	1(0.250)		2(0.166)	1(0.232)	2(0.154)

大学生の参禅行動の構造分析(その五) (江見・千野)

(1) ( )内数値が偏相関係数、( )外数値が偏相関係数の値の順位を示す。

(2) これまでの諸報告での数量化Ⅱ類の分析には、千野によるプログラムを用いてきたが、今回は富士通のANALYZE/A ANALYZEを用いた。二つのプログラムは、途中の計算法が若干異なり、既に第四報で報告した昭和五一年度の調査資料については、結果にいくつかの違いのあることが示された。しかし、表1と第四報での分析結果とを比較すれば明らかのように、少なくとも第一軸については、偏相関係数の順位は同じであることが認められた。

関係が存在する場合に、それらの中の二つの変数間の、残りのmマイナス二変数のそれらに対する影響を差し引いた、純粹な相関係数の強さを表わしている。数量化Ⅱ類の場合、外部基準と説明変数の間には一般に複雑な関係が予想されるが、ほかの説明変数の影響を差し引いた、外部基準と個々の説明変数との間の偏相関係数を計算することにより、各説明変数の外部基準への純粹な効きの程度を査定することができるのである。もちろん、その前提には、組み込まれた説明変数へのサンプルの反応のトータルパターンにより、サンプルの外部基準上の範ちゅうに対する違い(通常、サンプルがい

かなる群に属するかということ)を十分効率的に説明できるといふ要請がある。そのために数量化Ⅱ類では、各説明変数の効きの強さを検討するに先立って、相関比という統計学的な指標により、組み込まれた全変数による外部基準の説明なしいしは判別効率を査定するのである。表1の相関比の値は、ここでは、外部基準としての参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の六つの範ちゅうに対応する六つの群のサンプルの、表1に示す各質問項目に対する反応のトータルパターンによる判別効率の指標としての意味をもっている。六つの群のサンプルの反応は、理論上、五つの軸で完全に説明できることになるが、相関比の値からは、各年度の調査資料とも、表1のような二つの軸により、七割から八割は説明できるとが示唆される。

ところで、外部基準としての参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の規定因を探るためには、まず、これら二軸が指示している意味を明らかにする必要がある。そして、一般に、数量化Ⅱ類では、各説明変数の各範ちゅうに対して、外部基準へのサンプルの反応(サンプルの属する群)に対して、与えられた資料の条件下で最も大きな差が表われるような数値を付与する。各サンプルの外部基準上の得点は、この

大学生の参禅行動の構造分析(その五) (江見・千野)

ようにして各説明変数の各範ちゅうに付与された数値の和である。これが各サンプルの数量化得点である。得られたサンプルの数量化得点の平均を、各群ごと、各軸ごとに計算すれば、軸上での群の位置がわかり、ひいては各軸の持つ意味を明らかにすることができる。図1から図3が各年度の調査資料についてのその結果を示している。

これらの各図からは、まず第一に、各年度により各範ちゅうの位置に若干の違いはあるものの、六つの範ちゅうは、平面上で逆U字型を形造って位置していることが認められる。各軸の正負の方向性は、数量化Ⅱ類の場合、絶対的な意味を持ってはいるわけではないので、たとえば第二軸の正負を反転して考えてもよいのであるが、このようにすると、すべての年度の調査資料でU字型の関係がみられることになる。第二に、U字型の曲線(正確には帯)上に並ぶ六つの範ちゅうの位置関係についてみると、各年度により若干の違いはあるものの、5の(どちらでもない↓どちらでもない)がU字型のほぼ底に位置し、1の(よい↓よい)、6の(どちらでもない↓わるい)と(わるい↓わるい)が、U字型の両端に位置していることが認められる。

これらの二点から、第四報に比べると同様、どの年度の調

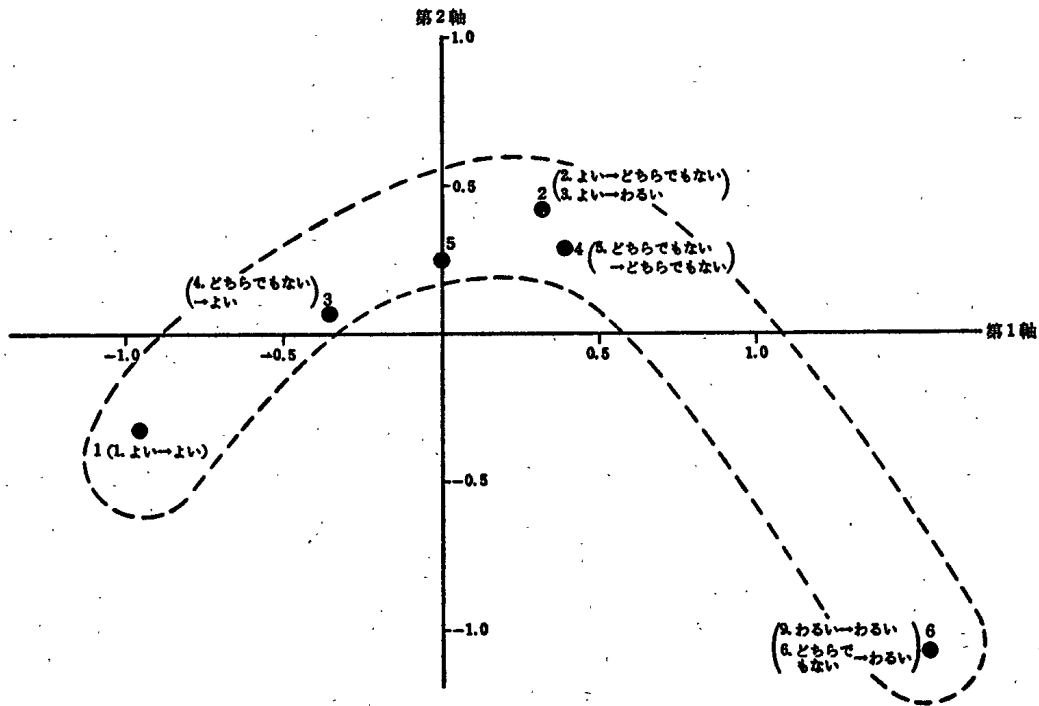


図1 昭和五一年度資料のイメージ変化の六範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

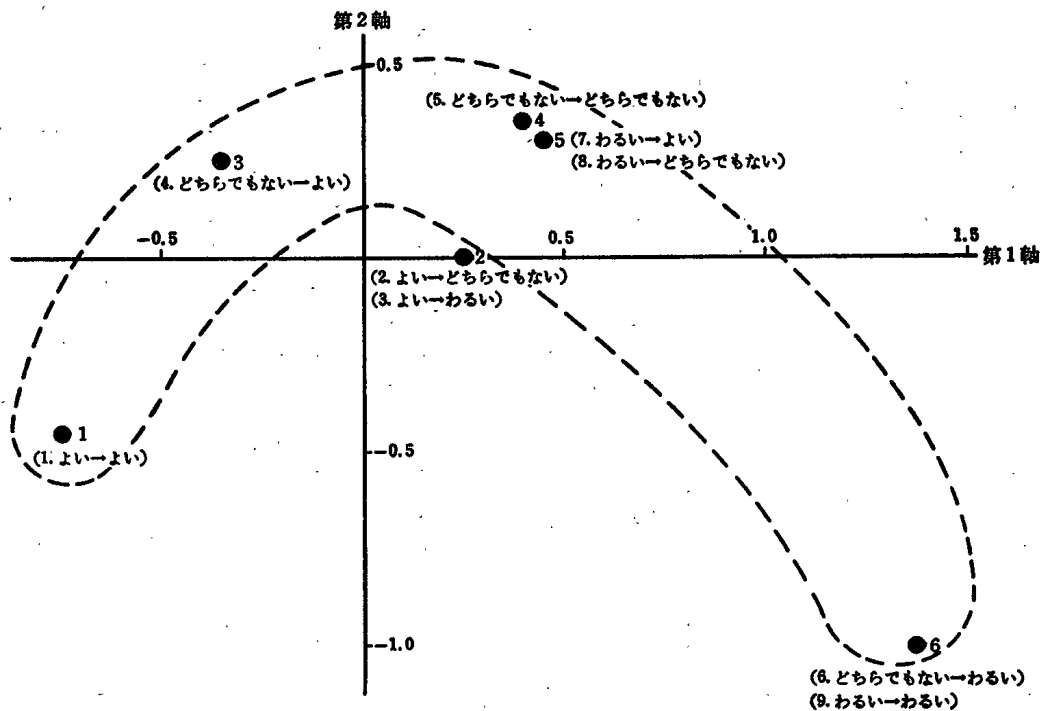


図2 昭和五九年度資料の、イメージ変化の六範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

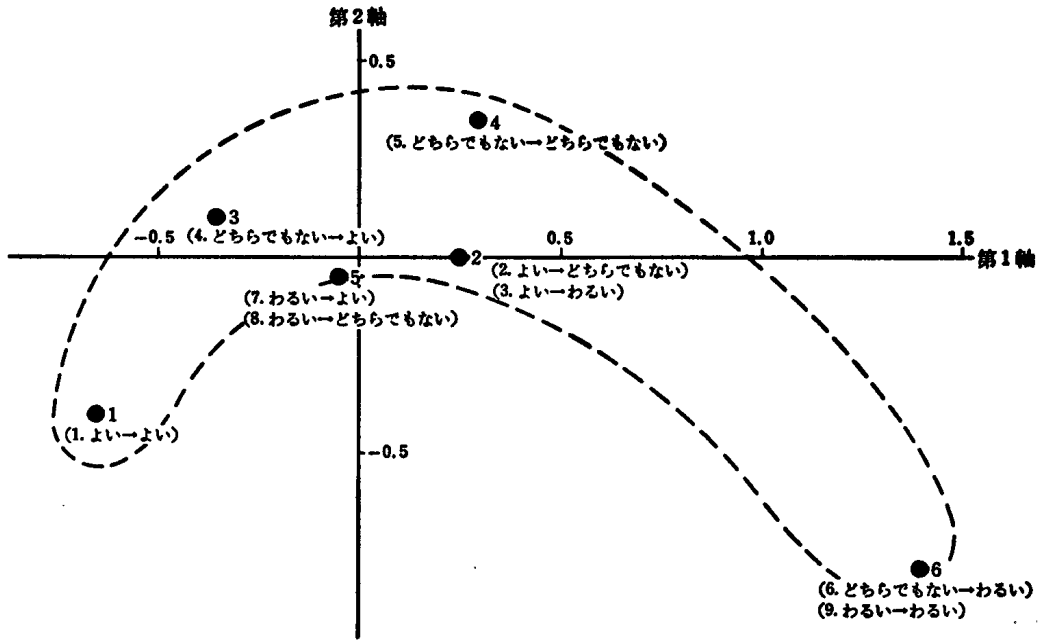


図3 昭和六〇年度資料の、イメージ変化の六範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

査資料についても、第一軸は、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化における良化・悪化の方向性を意味する軸であると解釈した。また、第二軸は、第四報では坐禅に対するイメージ変化の強度と解釈したが、今回は、それよりもより適切な表現として、坐禅に対するイメージ変化の極性を意味する軸と解釈することにした。

このような各軸の意味づけを手がかりとして、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の規定因を探ることができるのであるが、まず、第一軸のイメージ変化における良化・悪化の方向性を規定する主要な要因についてみると、表1から、一〇年前すなわち昭和五一年度と昭和五九、六〇年の最近の二年度では、いく分変わってきていることがうかがえる。すなわち、一〇年前では、第一ステージの参禅の動機は、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の良化・悪化の方向性に対する規定因としては影響していなかったのが、最近の二年間においては、偏相関係数の順位としては第3位ではあるものの、参禅の動機が無視できない規定因になってきているとみることができるといえる。言い換えれば、一〇年前には、学生の参禅行動における参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の良化・悪化の方向性は、主として、第二ステージの参禅

中の諸経験、とりわけ、坐禅時間を長く感じたかどうか、法話を有意義と感じたかどうか、永平寺の雰囲気良かったかどうかにより規定されていたのに対して、最近では、第一ステージの参禅前の坐禅に対する態度、とりわけ参禅の動機の積極性・消極性が、イメージ変化の方向性に対する規定因として影響するようになっていくことである。つまり、坐禅に対するイメージ変化の良化・悪化の方向性は、最近の学生では、参禅前にある程度決まっており、参禅中の諸経験の影響は相対的には弱くなっていることが示唆される。

次に第二軸の坐禅に対するイメージ変化の極性の規定因についてみると、興味あることに、第一軸とは異なり、一〇年前も最近も、主として、坐禅指導がきびしすぎると感じたかどうか、及び永平寺の雰囲気良かったかどうかなどであることが、表1から読み取れる。

以上、参禅の前後における坐禅に対するイメージ変化の規定因に焦点を当てて分析してきたが、その結果、一〇年前と比べると、坐禅に対するイメージ変化の良化・悪化の方向性の規定因としての参禅中の諸経験の影響力は相対的に弱まり、参禅の動機の積極性・消極性の影響力が強まってきたことが示唆された。そこで、次には参禅後の坐禅に対する

イメージの良し悪しに、参禅前のイメージの良し悪しがどのように影響しているかを明らかにするために、これまで参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化のパターン、すなわち、坐禅に対する参禅前のイメージと参禅後のイメージを対にしたパターンを外部基準として扱ってきたのを、参禅前のイメージと参禅後のイメージに分けて、前者を第一ステージでの説明変数に組みこみ、後者だけを外部基準としてさらに数量化Ⅱ類による分析を進めていくことにした。

なお、この分析での外部基準と説明変数は次のとおりである。

まず外部基準は、今も述べたように、参禅後の坐禅に対するイメージの次の三つの範ちゆう(群)である。

- 1 (よい)
- 2 (どちらでもない)
- 3 (わるい)

また、説明変数は、先での分析の場合と同様、第一ステージの一変数と第二ステージにかかわる八変数の計九変数である。

まず、これまでと同様に、各年度別の数量化Ⅱ類の結果から、偏相関係数の上位のものをいくつかぬき出して、順位づ



表2 参禅後の坐禅に対するイメージの規定因の年度間比較注

ステージ	質問項目 (説明変数)	第一軸			第二軸		
		51年度	59年度	60年度	51年度	59年度	60年度
		0.642	0.599	0.584	0.409	0.425	0.434
第一 ステージ	参禅の動機 (積極的—消極的)		4(0.151)	4(0.127)			
第二 ステージ	参禅前の坐禅に対するイメージ (良い—悪い)	4(0.229)	3(0.164)	1(0.281)	1(0.212)	1(0.238)	1(0.274)
	坐禅時間の長さの評価 (長い—短い)	3(0.234)	2(0.188)	3(0.162)			
	坐禅指導に対する評価 (きびしすぎる—もったきびしく)		1(0.200)			3(0.172)	
	坐禅指導の受容度 (指導どおり坐禅できた—否)						
	食事に対する満足度 (充分—不足)						
	睡眠に対する満足度 (充分—眠れなかった)						
	法話に対する評価 (有意義—否)	1(0.325)	5(0.147)	2(0.191)	3(0.125)		2(0.187)
永平寺の雰囲気に対する評価 (良かった—否)	2(0.286)			2(0.192)	2(0.215)	3(0.140)	

大学生の参禅行動の構造分析(その五) (江見・千野)

注 ( )内数値が偏相関係数 ( )外数値が偏相関係数の値の順位を示す。

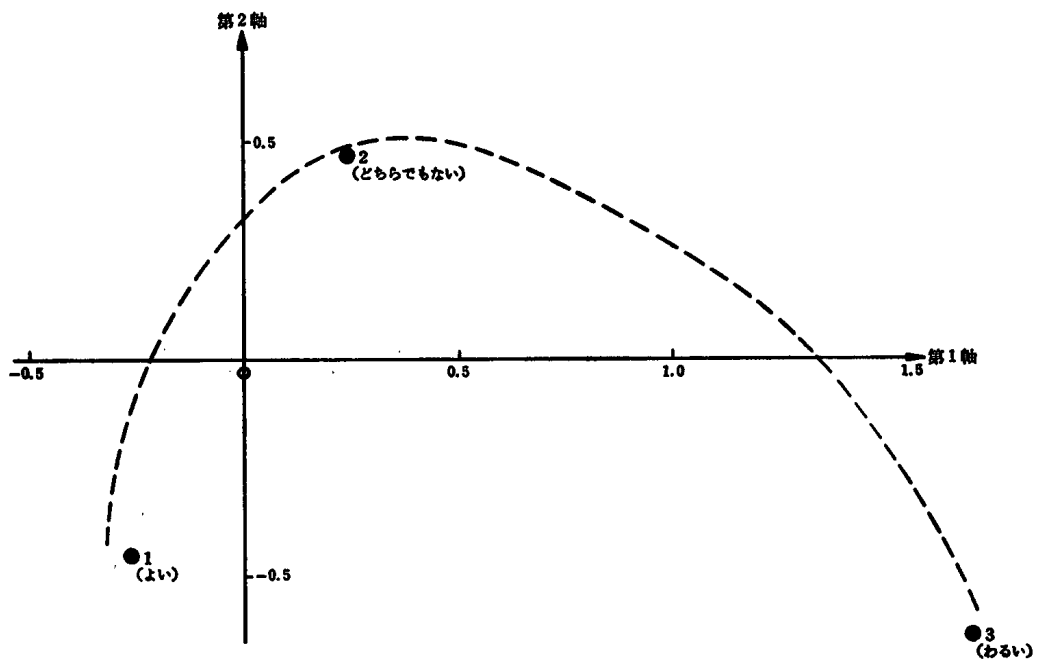


図4 昭和五一年度データの参禅後のイメージの三範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

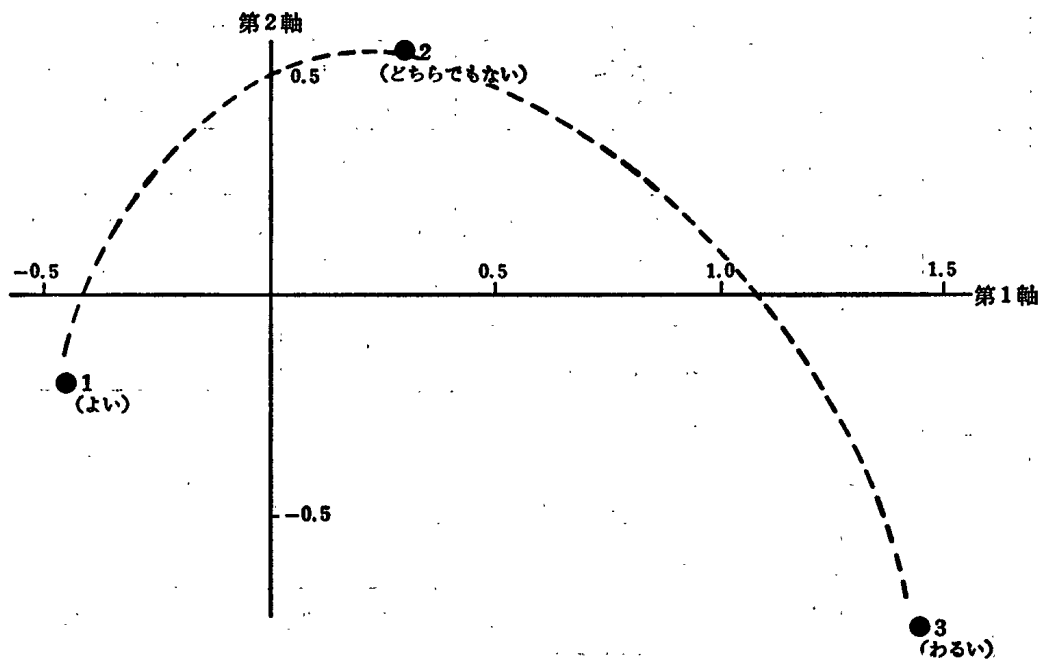


図5 昭和五九年度資料の、参禅後のイメージの三範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

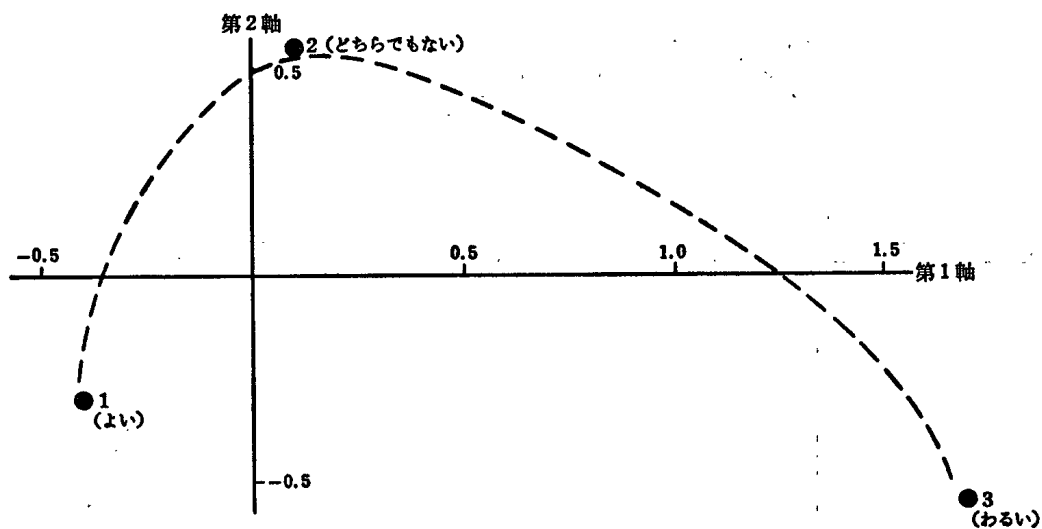


図6 昭和六〇年度資料の参禅後のイメージの三範ちゅう(群)の二次元上での位置関係

けをしてみると、表2のようになるが、この場合、三つの群のサンプルの反応は、理論上二つの軸によって完全に説明することができる。

そして、これら二軸の持つ意味を明らかにするために、各年度別に、外部基準の三つの範ちゅう(群)に属するサンプルの数量化得点の平均値をプロットしたものが、図4から図6である。

これらの各図から、外部基準の三つの範ちゅうは、平面上でU字型(二軸の正負を逆転させて)を形造っていることが認められる。さらに、U字型の両端には、各年度とも、参禅後のイメージの(よい)と(わるい)が位置していることが認められる。したがって、第一軸は参禅後のイメージの良し・悪しを意味する軸と解釈できる。一方、第二軸は参禅後のイメージの強度を意味する軸と解釈できる。

これら二軸の意味づけにしたがって、参禅後での坐禅に対するイメージの規定因を探ると、まず、第一軸の参禅後での坐禅に対するイメージの良し悪しの規定因については、表2から、先の分析での場合と同様に、あるいはそれ以上に、最近の二年次分の調査資料では、一〇年前の調査資料の場合と比較して、第一ステージの影響が相対的に大きくなっている

ことが明らかである。すなわち、最近の二年間では、参禅の動機だけではなく、参禅前の坐禅に対するイメージの良し悪しが第三ステージの参禅後の坐禅に対するイメージの良し悪しに影響してきているということが出来る。また、表2からは、昭和五一年度から昭和六〇年度へと参禅前の坐禅に対するイメージの良し悪しに参禅後の坐禅に対するイメージの良し悪しとの偏相関係数の値の順位は次第に高くなっていることも認められる。

次に第二軸の参禅後のイメージの強度の規定因についてみると、各年度共通に、参禅前の坐禅に対するイメージが規定因として第一位を占めていることが認められる。しかし、永平寺の雰囲気が良かったかどうか、法話に対して有意義と思っただかどうかなどもその規定因としてやはり各年度共通に影響している規定因としてやはり各年度共通に影響していることも認められる。こうした分析結果を先の分析結果と総合して考えてみると、参禅の前後での坐禅に対するイメージの变化や参禅後の坐禅に対するイメージの規定因としては、一〇年前と比較して、最近では、第二ステージでの参禅中の諸経験の諸変数の影響力は相対的に弱まり、参禅の動機や参禅前の坐禅に対するイメージなど、第一ステージの諸変数の影響

力が増してきているということが出来る。

#### 四、要約と討論

昭和五一、五九、六〇年の各年度の永平寺参禅学生を対象として、本学学生課が実施したアンケート調査の資料に基づき、参禅の前後での坐禅に対するイメージの変化のパターンの六つの範ちゅうを外部基準、参禅の動機及び参禅中の諸経験の九変数を説明変数とする数量化Ⅱ類によって参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化の規定因の年次比較を行なった。また、参禅の前後での坐禅に対するイメージ変化のパターンについて、参禅前のイメージと参禅後のイメージに分けて、前者を説明変数に組みこみ、後者だけを外部基準として、やはり数量化Ⅱ類によって、参禅後の坐禅に対するイメージの良し悪しに、参禅前のイメージの良し悪しがどのような影響しているかについても年次比較を行なった。

これらの分析結果からは、参禅の前後での坐禅に対するイメージの変化や参禅後の坐禅に対するイメージの規定因としては、一〇年前と比較して、最近では、参禅中の諸経験の諸変数の影響力は相対的に弱まり、参禅の動機や参禅前の坐禅に対するイメージなどの諸変数の影響力が増してきているこ

とが明らかとなった。

ところで、このように一〇年前と現在とで、相当に異なった分析結果が示されたことの理由についてであるが、本学の永平寺参禅行事は一泊二日という短期間での行事であるため、その間に組みこまれている行事内容はほぼ固定化されており、したがって、分析結果の違いの理由を行事内容の客観的なあり方に求めることはできないように思われる。やはり、この間における学生自身の意識の変化をこそ問題にせざるを得ないのではないかと思われる。

このように考えて、最近の青年を対象とする意識調査の結果をみると、総務庁青少年対策本部が最近発表した現代青年の生活志向に関する研究調査によると、六〇・三%の青年が、「将来のため努力するより、毎日の生活を楽しくやっていきたい」と考え、気ままな生活を望んでいるという。また、六八・四%の青年は、仕事よりも余暇を志向しているという調査結果も示されている。こうした現代青年の意識の特徴が、年とともに顕著になってきていることは、文部省数理統計研究所が五年ごとに実施している国民の意識調査によっても明らかにされている。とにかく、このような意識をもつ青年にとっては、厳粛な永平寺の雰囲気はなじめないし、日

夜徹しい修行にうちこんでいる雲水の姿に接しても、心をゆさぶられることは少ないのかも知れない。

もし、そうだとすれば、今後も同様な分析を続け、今回の分析結果が引き続き示されるかどうかを確認することが必要である。そして、今後も同様の分析結果が示されるようであれば、それに対するなんらかの対策を講ずることが必要となる。

#### 付記

本研究に必要な計算は、本学電子計算機センターのFACOM・M150F及び同情報処理教育センターのFACOM・M330Eを用いた。

なお、本研究は、本学学生課との共同研究として進められているものである。

付表1. 参禅アンケート

\_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_学科 男・女

1. 参禅の動機を簡単に答えて下さい。
2. 参禅についての感想
  - ① 今回の参禅は有意義であったと思いますか？
    1. 非常に有意義であった
    2. 少しは有意義であった
    3. 有意義でなかった
    4. わからない
  - ② 坐禅の時間についてどう思いましたか？
    1. 短い
    2. 適当
    3. 長い
  - ③ 坐禅指導の仕方についてどう思いましたか？
    1. 厳しすぎる
    2. 適当
    3. もっと厳しくして欲しい
  - ④ 指導どおり坐禅ができましたか？
    1. できた
    2. できなかった
    3. わからない
  - ⑤ 参禅の前と後で、坐禅に対するイメージはどのように変わりましたか？
    1. 良い→良い
    2. 良い→どちらでもない
    3. 良い→悪い
    4. どちらでもない→よい
    5. どちらでもない→どちらでもない
    6. どちらでもない→悪い
    7. 悪い→良い
    8. 悪い→どちらでもない
    9. 悪い→悪い
  - ⑥ 今後の学生生活の方向づけに役立ったと思いますか？
    1. 非常に役立った
    2. 少しは役立った
    3. 役立たなかった
    4. わからない
  - ⑦ 現代の生活に坐禅は必要であり、今後も坐禅の機会を持ちたいと思いますか？
    1. 非常に思う
    2. 少しは思う
    3. 思わない
    4. わからない
3. 永平寺についての感想
  - ① 食事はどうでしたか？
    1. 充分であった
    2. 不足であった
  - ② 睡眠についてはどうでしたか？
    1. 充分とれた
    2. 少しとれた
    3. とれなかった
    4. 分からない
  - ③ 法話について意見はありませんか？
    1. 非常に有意義であった
    2. 少しは有意義であった
    3. 有意義でなかった
    4. わからない
  - ④ 永平寺の雰囲気についてどう感じましたか？
    1. 非常によかった
    2. 少しはよかった
    3. よくなかった
    4. 何も感じない
4. その他について意見があれば記入して下さい。